



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コルナイ（1992、2000）の「社会主義体制変化論」に対する論評
Author(s)	朴，鍾碩
Description	書評
Citation	北大法学論集，60(4)，40[91]-27[104]
Issue Date	2009-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/40040
Type	departmental bulletin paper
File Information	HLR60-4_006.pdf



コルナイ(1992、2000)の 「社会主義体制変化論」に対する論評

朴 鍾 碩

1. はじめに

ハンガリー出身の経済学者コルナイ(Janos Kornai)は、社会主義体制について長年にわたり研究を重ね、多くの著書、論文を発表した。その中で体系的な著書としては、Kornai(1980,《Economics of Shortage》, Amsterdam: North-Holland)とKornai(1992,《The Socialist System-The Political Economy of Communism-》, Princeton University Press: Princeton, New Jersey)を挙げることができる。特に後者は、1989～1991年のソ連、東欧において社会主義体制が崩れた経験を反映して、「社会主義体制変化論」を体系的に提示している。また、Kornai(2000,〈What the Change of System from Socialism to Capitalism Does and Does Not Mean〉,《The Journal of Economic Perspectives》Vol.14, No.1 (Winter, 2000), 27～42頁)では、幾分新しくなった社会主義体制変化論を展開している。本稿では、Kornai(1992)及びKornai(2000)で提示された社会主義体制変化論を簡単に整理して、いくつかの論点から批評することにする。

2. コルナイの社会主義体制変化論の概要

本節においては、コルナイの社会主義体制変化論を簡単に整理することにする。

2-1. Kornai (1992)

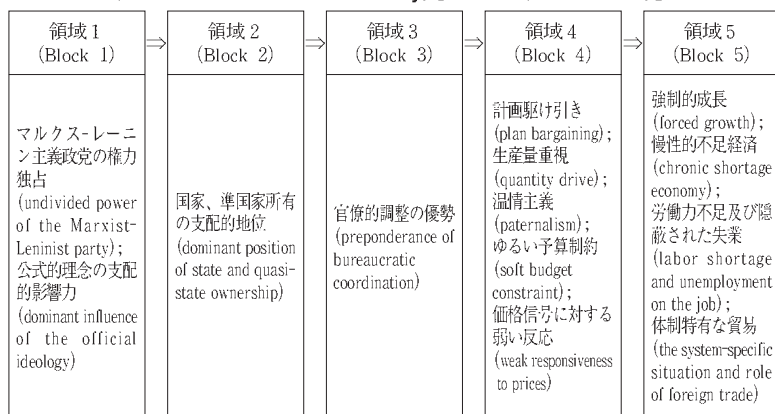
ここでは、「移行」及び「体制内的変化」が論じられている。社会主義体制において生じる変化は、「(下位)類型」(prototypes)を設定することで、把握できる。このような類型は、以下のように四つ設定することができる。¹⁾ 1) 革命的・移行的体制(the revolutionary-transitional system)、2) 古典的体制(the classical system)、3) 改革の体制(the reform system)、4) 脱社会主義体制(the postsocialist system) (19-21頁)。

まず、「革命的・移行的体制」は、資本主義体制で革命が起きて、社会主義体制へ移行する体制である(the transition from capitalism to socialism)。歴史的にこのような革命、移行は、マルクスが予想したこととは異なり、発展した資本主義諸国ではなく、経済、社会、政治的に後進的な国々で起きた(21-26頁)。

(社会主義化)移行期を経て、「古典的体制」が成立する。古典的体制は、次のような「因果的連関」を持つ構造を成している(361頁)。

ここには、古典的社會主義体制の多くの「現象」(phenomena)の間で成り立つ「主な因果的連関」(the main line of causality)が表現されている。便宜上、現実社会で実際に現われる(反対方向へ作用する)反作用(reaction)は、表示し

【図-1】 古典的社會主義体制の構造
(The Main Line of Causality) [Kornai (1992:361頁)]



¹⁾ これら下位類型が、資本主義体制と社会主義体制の中、どの体制に属するのかは、曖昧に敘述されているが、この問題は下で論ずることにする。

ていない(361頁)。

古典的社會主義体制を説明する鍵は、「政治構造」(the political structure)を理解することである。この体制では、「一党体制」(one-party system)が成り立つ。ところが、すべての一党体制が古典的体制に至るわけではないので、この執権政党が社会主義体制の「公式的理念」(the official ideology)で武装しなければならない。このような政党は、マルクス-レーニン主義政党(Marxist-Leninist party)と言える。これが、領域1に表現されている(360～361頁)。

古典的体制では、「国家所有」(state ownership)が優勢であるか、少なくとも核心的部門(the key positions)が国家所有の下にある。これが、領域2に表現されている。ところが、社会主義体制で、所有問題を政治構造の問題と対等に扱っている見解もあって、国家所有が、社会主義経済を説明する核心基準(the chief criterion)だという見解もある。しかし、歴史的事実が示してくれるように、国家所有が社会主義の政治構造を成立させるのではなく、社会主義の政治構造が国家所有を作り出すという点で、政治構造が、所有制度よりもっと規定的だと言える(361～362頁)。

古典的体制に独特な政治構造、公式的理念、所有形態が成立すれば、経済活動を調整するのに、「官僚的調整」(bureaucratic coordination)が主な役割を果たすようになる。² 私的企業活動、市場から自律的な経済行為者及び競争を取り除いて、政策決定、情報を中央集中化して、水平的関係より位階的、垂直的關係が支配的な現象になる。これが、領域3に表現されている(362～363頁)。

続いて、領域4に至る。ここには、古典的体制で生きていく行為者ら(actors)の利害関係、動機、彼らの持続的な行動、彼らの間の関係の主な特徴が属する。計画作成の過程の駆け引き(plan bargaining)、生産量重視(the quantity drive)、上級者の温情主義的(paternalistic)行動、ゆるい予算制約(the soft budget constraint)、価格に対する弱い反応(the weak responsiveness to prices)などを挙げることができる(363頁)。

最後の領域5は、古典的体制に典型的で持続的な「経済的現象」を現わす。

² Kornai (1992:91)は、「主要な調整機構」(main types of mechanisms)として、五つを提示している。1) 官僚的調整、2) 市場調整(market coordination)、3) 自律調整(self-governing coordination)、4) 倫理的調整(ethical coordination)、5) 家族調整(family coordination)。

強要された成長(forced growth)、労働力不足(labor shortage)、隠蔽された失業(unemployment on the job)、慢性的不足経済(the chronic shortage economy)、貿易の体制特有な役割(the system-specific role of foreign trade)などを挙げることができる(363頁)。

このように古典的体制は「凝集性」(coherence)を持っていて、これは強点でもあるが、弱点でもある。古典的体制は、密接に絡み合っている織物のようなもので、一本でも切れれば、すぐ全体が解けてしまう。このような古典的体制は、相当な期間存続することができるが、深刻な内的問題による蓄積される緊張と矛盾に、変化を強いられるようになる。

このような変化を強要する「誘引」(inducements)は、次のように四つに整理することができる。1) 蓄積される経済的困難、2) 経済、社会生活に対する大衆の不満、3) 権力層の自信喪失、4) 他の国々で起きる変化の事例など(383～386頁)。

このような誘引によって、古典的体制の多くの分野で変化が生じる。このような変化は、多次的な(multidimensional)ものであるが、分析のために、単純化すれば、二つの次元で、把握することができる。第一は、変化の「深さ」(depth)である。変化の生じる領域が左側であればあるほど、もっと深くて(deeper)、右側であればあるほど、もっと皮相的(more superficial)である。第二は、変化の「徹底性」(radicalism)である。同じ領域で変化が生じて、その徹底性は、相異なる場合がありうる(386～387頁)。

このような基準で、古典的体制で生じる変化は、いくつかに類型化することができる。第一は、「似以改革」(pseudoreform)である。これは、領域1、2、3の基本的属性の中、どれ一つにおいても、「それなりに徹底的な変化」(a moderately radical alteration)さえ起こすことができない変化を言う(388頁)。統制の「完成」('perfection' of control)は、この範疇に属する(565頁)。

第二は、「改革」(reform)である。これは、領域1、2、3の基本的属性の中で、少なくともいずれかの一つを、永久的に、本質的に変化させるが、社会主義体制という範囲を脱しない変化を言う(388頁)。この範疇には、政治的自由化(political liberalization)、私的部分の復活(revival of private sector)、自律経営(self-management)、市場社会主義(market socialism)、価格改革(price reforms)、巨視的緊張(macro tensions)などがある(565～568頁)。改革過程に成り立つ改革体制は、安定性がない。古典的体制を成す要素は、凝集性を持って、

お互いに引き寄せるが、それとは反対に、改革体制を成す要素は、凝集性がなくて、お互いに排斥する。したがって、改革体制は、二つの選択に直面するようになる。一つは、古典的体制に戻ることであり、もう一つは、革命的な政治的变化の過程に入っていくことである(570～574頁)。

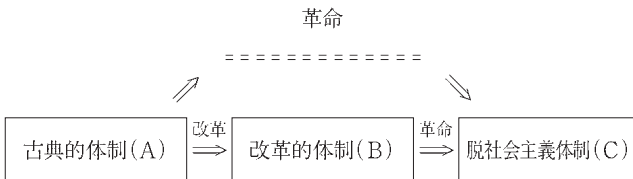
第三は、「革命」(revolution)である。これは、領域1で、もっとも根本的な変化が生じること、すなわち、共産党の権力独占が崩れることを言う。続いて、資本主義市場経済に向かう「脱社会主義移行」(postsocialist transition)が起きる(388～389頁)。だが、(革命で現われる)政府の変化を体制変化とは言えない。これは、体制変化のための政治的前提条件の中、一つに過ぎない。体制変化は、かなり長い時間を要する歴史的過程である。したがって、脱社会主義社会では、「二重体制」(dual system)がかなり長く持続するであろう(577～580頁)。

このような四つの類型は、一見、継起的(consecutive)に見えるが、実際の過程は複雑である。(社会主義体制への)移行期が終われば、古典的体制が成立するが、必ず改革体制が後に続くとは言えない。(1991年の時点で)古典的体制が持続している国々もあって(北朝鮮、キューバ)、古典的体制から(改革体制を経ずに)脱社会主義へ「跳躍」(jump)した国々もある(東ドイツ、チェコスロバキア)(19～20、392～395頁)。³

2－2．Kornai (2000)

ここでは、社会主義体制から資本主義体制へ移行する問題が論じられている。

³ このような理論を図式化すれば、次のようになる。



この図式を利用して、1991年の時点基準に、歴史的過程を簡単に整理すると、次のようになる。

- 1) A維持：北朝鮮、キューバ。
- 2) A⇒B：中国、ベトナム。
- 3) A⇒B⇒C：ポーランド、ハンガリー、ユーゴスラビア。
- 4) A⇒C：東ドイツ、チェコスロバキア、ルーマニア。

資本主義体制及び社会主義体制は、20世紀を支配した二つの体制である (27頁)。二つの体制は、「体制特有な諸属性」 (system-specific attributes) を通じて、分別することができる (28頁)。次の図表は、これを現わす (29頁)。

[図ー 2] 社会主義体制及び資本主義体制
(Model of the Socialist and Capitalist Systems) [Kornai (2000:29頁)]

社会主義体制のモデル (Model of the Socialist System)

1	2	3	4	5
マルクス-レーニン主義政党的権力独占 (undivided power of the Marxist-Leninist party)	⇒ 国家所有及び準国家所有の支配的地位 (dominant position of state and quasi-state ownership)	⇒ 官僚調整の優勢 (preponderance of bureaucratic coordination)	⇒ ゆるい予算制約 (soft budget constraint); 価格に対する弱い反応 (weak responsiveness to prices); 計画駆け引き (plan bargaining); 生産量重視 (quantity drive)	⇒ 慢性的不足経済 (chronic shortage economy); 販売者市場 (sellers' market); 労働力不足 (labor shortage); 隠蔽された失業 (unemployment on the job)

資本主義体制のモデル (Model of the Capitalist System)

1	2	3	4	5
私的財産及び市場に友好的な権力 (political power friendly to private property and the market)	⇒ 私的財産の支配的地位 (dominant position of private property)	⇒ 市場調整の優勢 (preponderance of market coordination)	⇒ 硬い予算制約 (hard budget constraint); 価格に対する強い反応 (strong responsiveness to prices)	⇒ 慢性的不足なし (no chronic shortage); 購買者市場 (buyers' market); 慢性的失業 (chronic unemployment); 景気循環 (fluctuations in the business cycle)

この図表で、政治権力、財産権の分布、調整機構の様相を現わす、左側の三つの領域は、各体制の「根本的属性」 (the fundamental features) である。これらは、各体制で経済主体に典型的な「行為パターン」 (the type of behavior) [領域 4]、典型的な「経済現象」 (the typical economic phenomena) [領域 5] を規定する (29頁)。

このように二つの体制を理解すれば、社会主義体制から資本主義体制へ移行する過程を説明することができる。ある社会が、領域 1、2、3 で敘述された

社会主義体制の根本的特徴から遠くなれば、「移行」(transition)過程が始まって、これらの領域が資本主義体制に特徴的な様相に至れば、変化が終わる。そして新しい状況が根付いて、不可逆的にならなければならない(30頁)。政治権力、財産及び調整様式の間相互作用が移行で重要であるが、政治的領域が主な役割を演じる。時には、領域2、3で移行が始まる場合もありうるが、領域1で、必要な変化が生じた後こそ、移行の完成が可能となる。政治的領域が私的所有、市場に友好的にならなければならないのである(33頁)。

移行を「政治的性格」(political nature)という側面から見れば、三つの類型に区別することができる。第一に、共産独裁が反共独裁によって交替されるという類型である。ハンガリーでベラ・クン(Bela Kun)政権(1919年)、チリでアイエンデー(Allende)政権、アフガニスタンで社会主義政権が崩れて、反共独裁政権が成立したことなどが、例として挙げることができる。

第二に、「ビロード革命」(velvet revolution)を経験した東欧のいくつかの国々で現われる類型である。昔の政治体制が崩れて、民主的体制が成立する過程にあると言える。(但、東欧の昔の社会主義国家、ソ連の解体で登場した国々が、皆、この類型に属するとは言えない。例：ユーゴスラビア、いくつかの中央アジア国々、ベラルーシなど)。

第三に、中国(そして、おそらく、ベトナムも)が新しい類型の可能性を示している。共産党が内部から変わっている。反資本主義的(anti-capitalist)政治勢力から親資本主義的(pro-capitalist)政治勢力に変わっているのである(33頁)。

3. 批評

Kornai (1992, 2000)は、非常に説得力のある社会主義変化論を提示していると言える。二つの体制を分別する「平行な」基準を設定して対比しているし、体制の因果的連関で、政治権力の問題をもっとも核心的な領域として設定している点が目立つ。とはいえ、いくつかの論点は再検討する必要があると思われる。

1) 古典的体制を説明するモデルを、そのまま社会主義体制全般を説明するモデルとして採択したのは、方法論上、問題があると思われる[(1992:19~21頁)では、社会主義体制で(下位類型として)古典的体制、改革的体制があると設定

していて、古典的体制を説明するモデルが、(1992:361頁)に提示されている。ところが、(2000:29頁)では、このモデルが社会主義体制を説明するモデルとして提示されている]。包括範囲の異なる二つの体制を説明するモデルが同じであるということは、このモデルが、二つのうち少なくとも一つは説明することができない、ということを意味する。社会主義体制全般を説明するモデルでは、いくつかの下位類型に「共通的」な特性を提示しなければならないし、ある下位類型を説明するモデルでは、他の下位類型と区別される、「分別的」な特性を提示しなければならない。⁴

2) Korani (1992)で、「下位類型」(prototypes)が、どの体制に属するのかが曖昧な場合があると思われる。社会主義体制の「内」で、革命的・移行的体制、古典的体制、改革的体制という「三つの類型」が分別されうし⁵、このような三段階の後に体制変化が来る場合に「新しい一類型」として脱社会主義体制を設定することができる⁶、と言っている。

この説明で、先ず曖昧なことは、脱社会主義体制がどの体制に属するかということである。社会主義体制か、資本主義制か、それとも「過渡期」にあるのか?恐らく、「過渡期」にあると設定しているように見える。⁷

⁴ 提示されているモデルは、社会主義体制一般を説明するのに相応しいか、それとも(下位類型の中で一つとして設定される)古典的体制を説明するのに相応しいか? 全般的に見て、社会主義体制一般を説明するのに相応しいようである。(一部の論点では異見があるが) 共産党の権力独占、国家所有の支配的地位、官僚調整の優勢などは、社会主義体制一般で現われる特性だと言える。

⁵ Three prototypes may be distinguished in the socialist system: 1. The revolutionary-transitional system (the transition from capitalism to socialism). 2. The classical system (or classical socialism). 3. The reform system (or reform socialism). (1992:19頁).

⁶ After these stages of socialism comes a change of system; in this respect one can talk of a further prototype: 4. The postsocialist system (the transition from socialism to capitalism). (1992:20頁).

⁷ “(革命で現われる)政府の変化を体制変化とは言えない。これは、体制変化のための政治的前提条件の中で一つだけである。体制変化は、長い時間を要求すると見える歴史的過程である。[A change of government is not a change of system, merely one of the political preconditions for it. The change of system is a historical process that seems likely to require a long period of time.] (1992: 577頁)” という言及で、うかがえる。

だとすれば、社会主義体制から資本主義体制へ移行する脱社会主義体制は、過渡期にあると設定して、他方で資本主義体制から社会主義体制へ移行する革命的・移行的体制は、社会主義体制に属すると設定することになるので、一貫性がなくなる。

このような曖昧さを解決するためには、「移行的体制」に対して、一貫した解釈が必要である。可能な解決策は、二つあると言える。一つは、ある体制から他の体制に変化する過渡期にあると解釈することである。このような解決策では、革命的・移行的体制と脱社会主義体制は、二つとも、過渡期にあることになる。もう一つは、「後ろ側」の体制に属すると解釈することである。このような解決策では、革命的・移行的体制は社会主義体制に属し、脱社会主義体制は資本主義体制に属することになる。⁸

3) 領域1で、権力独占、一党体制を設定しているが、これは、「政治領域」が経済体制を規定する、「もっとも深い」要因であると見た、優れた分析にもかかわらず、核心を濁ごす分析であると思われる。

⁸ どのように解決するのが良いであろうか？一応、いずれの場合においても、論理的一貫性は確保することができる。ところが、この問題は、どのように処理してもよい、恣意的な問題ではないであろう。体制の性格を決める「要因」が何か、という問題がかかっているからである。移行的体制を過渡期にあると解釈するのは、体制の性格を決める要因が「複合的」だと設定することであろう。“（革命で現われる）政府の変化を体制変化とは言えない。これは体制変化のための政治的前提条件の中で一つだけである。体制変化は、長い時間を要求すると見える歴史的過程である。（1992:577頁）”という主張には、このような認識がうかがえる。移行的体制を「後ろ側」の体制に属すると解釈するのは、体制の性格を決める要因が「唯一的」だと設定することであろう。すなわち、政治権力が「規定性」（determinacy）を持つと考えることである。筆者は、後者がより良い解決策だと思う。（現在の議論の対象である20世紀に起こる移行で）政治権力は、どのような社会を形成しようかという「遺伝的プログラム」（genetic program）〔（1992:368-369頁）〕を持っているが、これが途方もないものなので、全然実現できない場合、あるいは、外部干渉や脆弱な権力基盤のため、実現させる能力がない場合を除けば、「現実経済」をこの青写真に合うように変えるのは、時間の問題である。このような点から、特定の政治権力が成立して、現実経済の変化を追求する場合、現実経済は変化過程にあるが、「経済体制」は既に変わったと解釈するのが適切である。これは、ある経済体制を規定する「最小条件」は、政治権力が持つ「性向」（orientation）だと看做すことである。

ある社会が社会主義体制である理由は、執権勢力が社会主義政党(＝マルクス・レーニン主義政党)であるからであって、一党体制を通じて権力を独占しているからではないであろう。ある政治権力がどのような社会を建設するのかは、政治制度が一党制か多党制か、権力が独裁的か民主的か、という問題とは次元の異なる問題である。どのような政治構造を持っているかは、当該の執権勢力が、自分の構想を実現させるのにぶつかる「困難さ」の程度に関わる問題だけであろう。権力独占が保障される一党制は、そうではない多党制より、青写真を実現させるのにもっと便利であるということだけを意味する。「必須条件」とは言えない。

もちろん、歴史的、経験的に見て、社会主義体制では、いつも一党体制が成立してきたと言える。しかしこれは、「歴史的・偶然的」現象であって、「論理的・必然的」現象であるとは言えない。ここには、二つの事例を「傍証」として提示することができる。

一つは、中国、ベトナムで予想されるように、一党体制、権力独占が維持される形で、体制移行が起きる可能性である。どうして、権力独占、一党体制が維持される状況で、体制移行が起きる可能性があるのか？これは、Kornai (2000:33頁)でも言うように、反資本主義的政党から親資本主義的政党へ執権勢力の性格が変わる可能性があるからである。

もう一つは、政治構造が一党制か多党制か、政治権力が独裁的か民主的かということが、資本主義体制を形成、維持することとは関係がなかったという歴史的経験である。

このような現象は、体制類型を決める要因が「政治権力の性向」であって、「政治構造」ではない、ということを書き表すのではないか？資本主義体制の場合には、経験的にまで「実証」されたが、社会主義体制の場合には、経験的には実証されていない、という差が存在するにしても。

4) 領域2で、「財産」(property)または「所有」(ownership)という概念で、生産手段の所有問題、生産組織の類型問題を包括しているが、これはモデルが持つ分析力を落とすように見える。例えば、生産手段を国家が所有している状態で、私的主体がこれを借りて生産を組織する場合、これを財産または所有という単一の概念をもっては説明しにくいであろう。

5) Kornai (1992)で、はっきり区分されていた体制内的変化である改革、体制間変化である移行という概念が、Kornai (2000)では曖昧になっている。

Kornai (1992)では、改革は、古典的体制を改革的体制に変えるが、社会主義体制という範囲を脱しない体制内的変化で、領域1、2、3の基本的属性の中で、少なくとも一つを永久的、本質的に変化させることであり、体制間変化である移行は、革命で成立した新しい政権が、市場経済体制を目標として推進する変化である、としている。つまり、改革と移行は、概念的に確かに区分されているのである。これは、移行が起きる核心的な「きっかけ」として、執権勢力が急激な政治的過程の中で代替される革命を設定しているからであると言える。

ところで、Kornai (2000)では、改革という概念についての説明がないまま、移行という概念だけが現われる。すなわち、領域1、2、3が社会主義体制に典型的な形状から遠くなれば、移行が始まって、資本主義体制に典型的な形状へ至れば、移行が終わる。⁹そして、ある場合には、領域2、3で移行が始まりうるが、この場合には、政治領域が私的所有、市場に友好的になった後でこそ、移行の完成が可能である¹⁰、としている。

ここで問題になるのは、領域2、3で移行が始まる場合、Kornai (1992)で言う改革とはどのような連関を持つのか、という点である。この点が、確かに説明されていない。改革は、移行が始まる過程か、それとも改革が一定の「段階」に到達すれば、移行段階に入るのか？このような困難は、主に、Kornai (1992)で設定したこととは異なり、「革命的な政治的変化過程」(a process of revolutionary political changes [1992:574頁])で起きる権力交替なしに、移行の起きる場合が、Kornai (2000)で新しく予想されているからであろう。

これを概念的に解決するのは、容易ではない問題であろうが、試みる価値はあろう。Kornai (2000)では、結果的に政権交替なしに移行が起きる場合、移

⁹ The process of transition begins when society shifts away from the fundamental characteristics of the socialist system described in blocks 1, 2 and 3, and finishes when society reaches the configuration of blocks 1, 2 and 3 characteristic of the capitalist system. Moreover, the new state of affairs has to take roots and become irreversible. (2000:30頁).

¹⁰ The transition from socialism to capitalism starts in some cases in blocks 2 and 3, but it can be completed only after the necessary change has occurred in block 1; namely that the political sphere has become conducive to private property and market-friendly. (2000:33頁).

行の開始の時点 reforms の始まりとして暗黙的に設定しているのではないかと
思われる。領域 2、3 で移行が始まる場合、領域 1 で必要な変化が生じた後こ
そ、移行が完成するという敘述(33頁)、及び鄧小平時期に行われた農業改革を、
体制移行を論じながら取り扱っている(32頁)ことからもうかがえる[この現象
は、Kornai (1992)では、改革として取り扱われたものである]。

このような処理方式は、体制内的変化である改革、体制間変化である移行と
いう概念を維持しにくくさせるものであると言える。しかし、これらを区分す
ることは、社会主義体制の変化を説明するのに重要である。その際、Kornai
(1992)で設定しているように、体制移行が、権力交替をきっかけに行われば、
問題は簡単であろう。ところで、Kornai (2000)で設定しているように、権力
交替なしに起きる可能性(中国、ベトナム)を予想すると、二つの概念を区分す
るのが難しくなった。Kornai (2000)では、満足な解決策が提示されていない
と思われる。権力の交替ではなく、権力の性格の変化で体制移行が起きる可能
性を予想しながらも、性格の変化の様相を「あまりにも単純に」解釈している
からである。つまり、Kornai (2000)では、性格の変化の様相について「反資
本主義的か、親資本主義的か」ということと設定しているのである。しかし、
このような図式では、権力が、古典的体制では反資本主義的であるが、改革の
体制では親資本主義的だと解釈されるはずである。したがって、権力交替なし
に体制移行が完成する場合、これは「連続的」過程だと解釈されて、移行開始
の時点が改革開始の時点だと解釈されるであろう。

しかし、このように処理すれば、ある変化が体制内的変化に属するか、体制
間変化に属するかを、判断する基準が消えてしまう。例えば、鄧小平時代の中
国で起きる農業変化について、当該の時点で研究を遂行する場合、改革という
範疇に入れるべきか、移行という範疇に入れるべきかを判断することができな
くなる。以後、権力交替が起きて体制移行が起きれば、改革範疇に入れて、権
力交替が起きないで体制移行が起きれば、移行範疇に入れるという処理を行っ
ていくと、これは、結果を確認する前には判断することができない結果論的な
理論になってしまい、同じ現象を二つ相異なる範疇に所属させる誤りを引き起
こすことになる。

権力の性格を、反資本主義的か親資本主義的かという二つの分類ではなく、
次のように、三つに分類した方が、このような難点を解決するのに役に立つと
思われる。

- 1) 私的経済活動を清算しようとする場合。
- 2) 私的経済活動を部分的に活用しようとする場合。
- 3) 私的経済活動を自由に許容する場合。

このようにすれば、2)は、体制内的変化である改革を推進する状況であり、また3)は、体制間変化である移行が起きた状況だと考えられる。このような基準で見れば、鄧小平時代の農業改革は移行範疇に属するのではなく、相変らず、改革範疇に属するようになる。当時中国執権勢力は、私的経済活動を部分的に活用しようとしていた状況だったからである。¹¹

6) Kornai (2000)では、移行を「政治的性格」という側面から、三つの類型に分類しているが¹²、かなり問題があると思われる。

先ず、基準が曖昧である。類型1は、共産独裁が反共独裁に取り替えられる現象であり、類型2は、民主体制が成立する現象で、類型3は、権力交替なしに移行が起きる現象であると言えるが、ここで、類型化の基準は何か? 「政治的性格」という基準は、漠然なことであり、明らかな基準が何なのかが分からない。

更に、(筆者自ら指摘しているところであるが)類型化から抜け出た国々(昔のユーゴスラビア、いくつかの中央アジア国々、ベラルーシなど)さえある。これは、提示された類型化が「包括的」ではないということを示している。¹³

¹¹ もちろん、権力の交替がなしに性格が変わる場合、「政治的修辞」を分析して、1)から2)に変わる時点を把握することはわりと容易であろうが、2)から3)に変わる正確な時点を把握することは難しい。これは、私的経済活動を自由に許容することに関連して、自分の正当化で困難を経験するはずなので、このような変化が「隠密に」起きることがありうるからである(長い間、私有財産が搾取と抑圧の根源だと宣伝してきたので、私的経済活動を自由に許容する政策を取ることを論理的に正当化しようとするれば、「自己否定」をせざるを得ないが、これは容易でないことである)。この場合には実際の政策がどうか、現実経済で私的経済活動がどれほど活性化しているかを分析すれば、改革的段階と移行を判定することができる。すなわち、私的経済活動を自由に許容する政策を取るか、私的経済活動が「主導性」を握るようになる時点が移行の起きる時点だと言える。

¹² In terms of the political nature of the transition, three types of change from the socialist system to the capitalist system seem to emerge. (2000:33頁).

¹³ ある全体集合を対象にしてこれを類型化する場合、望ましい状態は、全体

4. まとめ

以上で論じたように、Kornai (1992) 及び Kornai (2000) において提示された社会主義体制変化論は、非常に説得力のある論理であるが、いくつかの点では再考が必要だと思われる。本稿で提起した批評を要約することでまとめとした。

- 1) 古典的体制を説明するモデルを、そのまま社会主義体制全般を説明するモデルとして採択したのは、方法論上、問題がある。
 - 2) Korani (1992) で、脱社会主義体制がどの体制に属するかが曖昧である。すなわち、過渡期に属するの、資本主義に属するのかが不明である。
 - 3) 領域 1 で、権力独占、一党体制を設定しているが、ある社会が社会主義体制である理由は、執権勢力が社会主義政党(=マルクス-レーニン主義政党)であるからであって、一党体制を通じて権力を独占しているからではない。
 - 4) 領域 2 で、「財産」(property) または「所有」(ownership) という概念で、生産手段の所有問題、生産組織の類型問題を包括しているが、二つは分離して取り扱った方がよい。
 - 5) Kornai (1992) で、はっきり区分されていた体制内的変化である改革、体制間変化である移行という概念が、Kornai (2000) では曖昧になっている。
 - 6) Kornai (2000) で、移行を「政治的性格」という側面で、三つの類型に分類しているが、分類の基準が曖昧で、分類結果が包括的でない。
- (終)

集合に属するどの要素も分類結果から外してはいけなくて(包括性)、一つの要素が複数の部分集合に属してはいけない(排他性)ということである。